

フランシス・ベーコン パリー・ジュール・コレクションによる

渋谷区立松涛（しょうとう）美術館 2021.04.20～06.13

「フランシス・ベーコン」(1909～1992)は、独学で絵画を学んで第2次世界大戦後に衝撃的な抽象画を発表して、美術界に本格的にデビューしたアイルランド出身の画家で、「ピカソ」と並び“20世紀を代表する画家”とされている。

本展は、画伯の住まいの近所に住んでいて身の回りの世話し、作品を保管していた「パリー・ジュール」が、シュルレアリスムに影響を受けていた初期の頃の作品や、下絵的なドローイングやスケッチ類に、線やイメージが描かれた雑誌や新聞の切り抜きなどの“鬼才が遺した秘蔵品”「約130点」に加え、画伯が語った映画や文学、愛読書のエピソードなどが日本で初公開されている。

《Xアルバム9裏 一叫ぶ教皇》1950年後半～60年代前半 油彩/コンテ



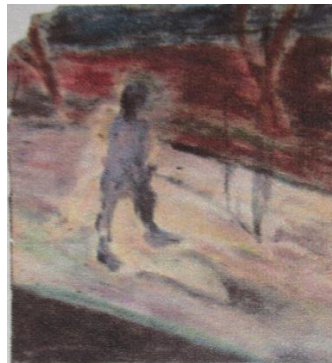
この作品の制作には、スペインの画家「フランシス・ベラスケス」の影響を多大に受けている。

画伯は、20年以上にわたって「教皇シリーズ」を描き続けたとされ、使用されている特筆すべき技法は、“主題の教皇の顔が大きく変形し上を見ながら口を広く開けて顔を歪ませていること”である。

この大きく開いた口の絵画は、半生に渡って描き続けたとされ、教皇という立場の苦しみを“叫びの表現”という形で表現しているという。



《Xアルバム7裏—ファン・ゴッホ・シリーズ》
1950年代後半～60年代前半 油彩・コンテ、紙



《Xアルバム5表—ファン・ゴッホ・シリーズ》
1950年代後半～60年代前半 油彩・コンテ・チョーク、紙



《Xアルバム3表》1950年代後半～60年代前半 油彩・コンテ・チョーク、紙、フォトモンタージュ